

## 分子科学研究所所長招聘会議 「『化学の近未来』：化学とAI・大学の質保証」

2017年5月30日午後、分子科学研究所所長招聘会議として「『化学の近未来』：化学とAI・大学の質保証」が行われました。日本学術会議化学委員会の主要活動の一つとして、日本化学会、分子科学研究所と協力して毎年行われているものの一環です。本年度は2部構成でプログラムが生まれ、第1部で「化学とAI」、第2部で「化学分野の参照基準」のテーマで議論が行われました。

第1部は化学分野の学術研究の具体的な内容に関する議論が中心で、これまでのこの会議のテーマとは趣を異にするものでした。昨今のAI技術の発展とその影響は研究者の誰もが知る状況になっているところですが、化学の分野においてそれが現在どのように利用されているか、また将来どのように展開しうるか、それをこの分野をリードしている大学・国立研究機関の研究者、及び産業界の研究者を招いて様々な実例が紹介され、多面的な議論がなされました。物質開発の方針を立てるため

に機械学習が用いられて成功した事例や、化学プロセスの管理にAIが用いられて効率化された事例など、研究現場での実例が種々紹介されました。化学においても分野によっては今後AIの重要性は増し、基本的な技術の一つとなることを納得させる内容で、人材育成や教育もそれに伴い必要となることも議論されました。

第2部は、大学における教育の質を保証するために学術会議で進んでいる、学士課程での教育内容の体系と養成すべき能力を再定義する作業に関する議論を中心とするものでした。大学で教鞭をとる研究者のみならず、長年高等学校での教育経験を有する化学教育の研究者、産業界からも話題提供があり、「高-大接続」や「探究型の教育」の必要性、化学を専門とはしない学生を含む様々なニーズへの対応の方法、産業界に

おける大学教育への期待など、多方面にわたり議論がなされました。

今回は座長の先生方に少々時間のコントロールをお願いしてあったため、概ね予定通りの進行でしたが、質問や総合討論時間では議論が途切れることなく続き、参加者の関心の高さと内容の重要性を物語っていました。その後交流会が開催され、引き続き議論の輪も広がるとともに、情報交換や世間話、また某先生が確信的に偶然持参されていた楽器の演奏もあって、盛況のうちに閉会しました。

(岡本 裕巳 記)



## 分子研の新たな人事制度の紹介

人事は組織運営の要である。とりわけ、分子科学に携わる研究者が多く集い、また巣立っていく人材ハブとしての機能を有する分子研においては、伝統に基づく継続性と、時代に合致した先進性とを両立した制度設計が欠かせない。分子研では、これまでの教授・准教授・助教といったいわゆる承継ポストについて、引き続き外部委員のア

ドバイスを取り入れながら国際公募等に対応させつつ運用しているが、同時に新たな試みとして運営会議・教授会議・人事選考部会・主幹会議等の議論を踏まえていくつかの制度を開始した。本年3月までの人事選考部会の活動報告も兼ねて、今回これらの新制度を紹介する。

### 若手独立フェロー（特任准教授）制

度は、平成23年度より制度設計と運用を開始し、平成23年度に2名、25年度に1名、28年度に2名の採用を行った。本制度では、優秀な研究者が若いうちに独立したポジションを持ち、自分の力で新たな分野を切り拓くことを促進するために作られた制度であり、任期として5年を定めている。既に運用開始から7年が経過しており、いくつか